

高等学校日本史における戦争学習と博学連携

Education about War and Cooperation with Museums in High-school Japanese History

地理歴史科 永尾 瑠衣

<要旨>

本研究は、歴史教育において戦争を取り扱う際に、生徒がただ教科書の記述の丸暗記をするのではなく、そのときの様々な立場に自身を置いて考えたり、様々な視点から事象を捉えていったりしながら、戦争への認識を深めるために効果的な手法の一試論である。

なお、本研究で取り扱う戦争は、高校1年生で履修する日本史Aでの取り扱い範囲かつ日本が関連した対外的な戦いについてとする。それに伴い、今回は日本国内での内乱は含めないものとするため、日清戦争、日露戦争、第一次世界大戦、第二次世界大戦についての学習の中で、様々な立場からものごとを考察していく力を育成することとした。ただし、長い目での変容を探るという観点から、2年生に開講した総合の特別授業についても探ることとする。提示資料とその反応、課題と成果物から、生徒の状態把握を試み、効果の分析をした。

<キーワード> 博学連携 実物教材 ポートフォリオ ICT ESD 文化遺産教育 ジグソー法
バズ学習 クロストーク 専門家のマント

1. 問題の所在

筆者は、社会科において大切なことは、「社会力をつけ、生涯を通して生きる力を養うこと」だと考える。「社会力」というのは門脇厚司の言葉で、人が人とつながり、社会をつくり、運営し、より良い方向に変えていく能力のことである。

門脇厚司は、

「では、本書でいう『社会力』とは何か。端的に言えば、社会を作り、作った社会を運営しつつ、その社会を絶えず作り変えていくために必要な資質や能力ということである。」(p.61)

「本書でいう社会力は、社会のある状態のことをいうのではなく、もっと主体的に、好ましい社会を構想し、作り、運営し、改革していく意図と能力と、そのための日常的な活動を含めた意味で用いることにしたい。」(p.63)

と述べ、好ましい社会を自分たちで築き、より良い方向に歩いていくことのできる力を社会力と呼び、その社会力の育成を奨励している。

(門脇厚司 1999年『子どもの社会力』岩波書店:p.61, p.63)

しかし、この社会力を養うためには、社会科を学ぶ意義に生徒自身が気づかなければならない。

そこで、年度はじめのガイダンスで意識調査を試みるのだが、歴史が苦手な人に挙手をしてもらうと、4分の

1から3分の1の生徒が手を挙げる。その理由を聞いてみると、「理系なのになぜ学ばなければならないのかわからない。」「暗記をしなければならないのが面倒くさい。」「受験で使わない。」などの声があった。このことから、①日本史を生業としない・受験で使わなくても、自身の分野と歴史を絡めて考えていく癖をつけることの重要性、②今まで知識を得ることこそが歴史の学びだと思っている認識を覆す必要性、を伝えていく方針を固めた。

これらの重要性は、学習指導要領の日本史Aの「内容(1)私たちの時代と歴史」でも示されており、『現代の社会やその諸課題が歴史的に形成されたものであるという観点から、近現代の歴史的な事象と現在との結び付きを考える活動を通して、歴史への関心を高め、歴史を学ぶ意義に気付かせる。』という目標を達成させるしかけを授業に盛り込むことで、すべての生徒が自身の分野に関連付けながら歴史を活用していく術を養うことが可能となる。

2. 本研究の目的と方法

本研究は、歴史教育において戦争を取り扱う際に、生徒がただ教科書の記述の丸暗記をするのではなく、そのときの様々な立場に自身を置いて考えたり、様々な視点から事象を捉えていったりしながら、戦争への認識を深めるために効果的な手法を探ることが目的となる。

これには、生徒の実態を把握する必要があるため、生徒にアンケートをとって戦争の授業の良いあり方を探った。

◎戦争の授業に関するアンケート

生徒が戦争への認識を深めるために効果的な手法を探るには、まず、生徒が戦争について、どのような角度からのアプローチに興味を示して、どのような経験がひとりひとりの認識に影響を与えているのかを探る必要があった。そこで、『戦争に関するもので、一番印象に残った授業（観たビデオの内容、学校関係で行った史跡や博物館など）はどのようなものか。』というアンケートを1年生の5クラスに実施した。回収数211に対して、23人が特別な授業を受けていない・印象に残ったものがないという回答であったため、188の回答から選別をした結果が以下のものである。

印象的な授業	人
映像を観る	81
体験談を聞く	42
博物館を訪れる・体感する・実物に触れる	22
映画・アニメを観る	10
教員の授業そのもの	9
録音された当時の肉声を聞く	6
写真を観る	5
本・物語を読む	5
手紙・手記を読む	3
エピソードを伝えられたこと	2
調べ学習をする	1
感想文を書く	1
自衛について考える	1

●映像

第一次世界大戦

(精神崩壊／新兵器の脅威／大量に人が死ぬ場面)

第二次世界大戦

(ヒトラー／ユダヤ人迫害／アウシュビッツ／太平洋戦争／東京大空襲／沖縄戦／国民生活／特攻隊志願／逃げる人々と兵士の様子／戦艦大和／空爆しているアメリカ軍／使われていた曲)

●体験談

被爆者／沖縄戦経験者／教員の親族の体験談／生徒の祖父母の体験談／防空壕・空襲・疎開／アウシュビッツ収容所での体験談／戦場カメラマンによる現在おこっている戦争の話

●博物館・体験・実物

広島原爆資料館／広島原爆資料館の蠟人形／広島原爆ドーム／長崎原爆資料館／知覧特攻平和会館／靖国神社／立命館大学博物館／松代地下壕／戦火で焼けた弁当箱／被爆したもの／原爆で壁にうつった人影／グアム戦争の傷跡／香港歴史博物館／Jewish Holocaust Museum

●映画・アニメ

はだしのゲン／火垂るの墓／硫黄島からの手紙／シンドララーのリスト／永遠の0

●教員の授業

東京大空襲の悲惨さ／原爆の被害／うまい伝え方

●録音された当時の肉声

戦争へ行く直前の兵士が録音した家族へのメッセージ／特攻隊肉声

●写真

原爆で真黒焦げになった人間／アウシュビッツ収容所／原爆の被害の数々

●本・物語

戦時下の人々の生活／広島原爆絵本／沖縄戦についての短編小説

●手紙・手記

大岡昇平『俘虜記』／兵士の手紙

●エピソード

東京大空襲の話／敵兵に発見されるのを恐れた母親が赤ん坊を殺害した話

●調べ学習の題材

当時の国民の生活について調べたこと

●感想文の題材

特攻隊の資料を読んで

●自衛について考える

集団的自衛権について考えたこと

以上のような内容が、中学生までに生徒が触れた歴史教育の中で確実に認識の変容にかかわったということがわかった。この結果をふまえて平和について考えさせるための手立てを分析すると、身近に歴史を感じさせることの有用性、ひとごとと捉えないようにする配慮の重要性がみえてきた。また、生徒の今までの経験をふまえて、高校段階ではさらに多角的な視点から戦争について知る必要性も出てきた。私たちは一日本国民だが、同じ日本国民の中から戦争を遂行する人が出てきたのも事実である。ではこのように到る心理は何なのか。このように到る社会的要因は何なのか。このことを考えた上で、生徒が自ら問題意識を高め、戦争を批判できるような主体性をもって平和を構築するための社会力の育成を目指す。

以上をふまえて、提示資料とその反応、課題と成果物から、状態把握を試みることにした。その際、政府の立場、天皇の立場、諸外国の立場、富裕層の立場、農民の立場、都市市民の立場、など、様々な視点で歴史を捉えられる能力を育成した上で、鳥瞰して事象のつながりを

捉え、そう判断した自分をふりかえることのできるような、メタ認知の育成も重視した。

3. 日本史Aにおける、戦争学習の実践とその分析

3-1 日清戦争

日清戦争は、報道に注目させながら、日本政府の立場、天皇の立場、伊藤博文の立場、清の立場、朝鮮の立場、日本国民の立場、で考えていった。

まずは、大本営を広島に設置した理由について考えさせる。これには、距離の近さはどのクラスでも答えとしてあがり、広島城の防衛の利点についてもクラスによっては答えとしてあがったが、国会や明治天皇まで移って戦争を遂行した意図については着目する生徒はいなかった。そこで、当時の国民から見て国の主要機関が東京から移転することがどのようなことだと思うかという観点で考えさせると、大日本帝国憲法の読解や天皇の地位の高まりについて学習している生徒たちは、たちまち天皇が移ることに着目して、日本が戦争に本腰を入れていることを国民に伝え、自覚をもたせる役割があったことに気づいていった。

次に戦局だ。日清戦争においては、錦絵が報道の役割を果たした。そこで、プロジェクターで豊島沖海戦から戦いの経過順に下関講和条約まで錦絵を見せていき、実際の状況を伝えていく。その際、生徒の手元には、戦いの経過の書き込まれた地図を渡しており、地理的にも経過を追わせる。

目の前に映し出された錦絵には、華々しく勝っていく日本の活躍が描かれている。その錦絵を見せながら他の文献からわかる実際の戦況も補足することで、報道の偏りに気づき、生徒は口々に違和感を訴えていた。

戦局については、地理的にも追っていくため、途中で「日本と清で戦っているのに、戦場が朝鮮だ。」という点に違和感を覚えて発言する生徒も出てくる。

こうして最後には、清が降伏して敵将自決の錦絵を見せた後、下関講和条約についての錦絵から講和条約の締結の過程に授業を進める。伊藤博文が李鴻章でないと条約を締結しないとすればはじめにきた使者を帰したエピソードを話し、次に講和条約の会場となった春帆楼について、伊藤博文とフグのエピソードや伊藤博文が春帆楼と名付けた理由について話した上で、なぜ伊藤がこの会場に設定したのかを伊藤博文の立場に立って考えてもらうように指示をする。このとき生徒は頭を悩ませながら必至に考えを巡らすのだが、答えには到らない。出た答えとしては「伊藤博文はおいしいフグをごちそうして日

本の良さを伝えたかったから。」や「伊藤博文がフグを食べたかったから。」というものであった。様々な視点から戦争をみる訓練は、まだ西南戦争や戊辰戦争でしかしていない生徒たちにとって、まだ国のトップの意図について思いを巡らせることは難しいようであった。しかし、これは本稿の範囲においては対外的なはじめての戦争ということで、様々な視点から考えることの重要性と、自身を投影して思いを巡らせる訓練の一環であるため、そのことに気づかせた上で教員の方で答えを述べる。このことから講和条約締結時の駆け引きの難しさに生徒たちは気づいていった。このあとで講和条約の内容を史料から読解していくのだが、背景をよく理解してからの史料読解は、生徒が内容を自ら知りたいとして進めていくため、効果的である。

また、錦絵で戦局を追っていく中で、国民の立場を明確にするために、英雄像の誕生にも着目させた。

- ・安城の渡しの戦いで、流れ弾に当たってもなお命のつきるそのときまでラッパ手としての仕事を企うした歩兵隊の木口小平。
- ・平壤の戦いにて、平壤城の玄武門城壁をよじ登り内側から味方を招き入れた、工兵の原田重吉。
- ・金州の戦いにて、敵弾の中を攻め進み、城門を突破した、工兵の小野口徳治。

この紹介の際には、それ以前の日本人の中国観と英雄像について言及しておく必要があった。その点においては、『明治大正見聞史』に描かれている当時の日本の庶民の姿を紹介することで、日清戦争前後の認識の変化を感じさせた。

「明治の外交史を緋けば、我国と清国との戦いは偶然のことでなく、来るべくして来た凶変であったのだけれど、政府の事情も何も知らぬ地方民は、……どうしてこの戦争が起こったかは、容易に附に落ちなかった……何故かと言えば、私たちはこの戦いの始まるその日まで支那人を悪い国民とは思っていなかったし、まして支那に対する憎悪というものを少しも我々の心の中に抱いてはいなかったのだから。」「私は父から毎夜漢文を教えられた。……学校で毎日教わる文字も支那の文字だ。……その頃の日本の文明の九分九厘は、由来をたずねると皆支那から渡来したものだ。」「夏祭には各町から立派な山車が引き出されたが、その高い二の勾欄の上の岩の上に置かれる大きい人形の多くは、支那の英雄だった。(漢の高祖、楚の項羽、関羽、張飛、魯智深など)……私等子供の頭に、日清戦争以前に映じた支那は、実はこの位立派な、ロマンチックな、そしてヒロイックなものであつ

た。その時まで、私たちが見た物聞いた物で、支那に敵意を持つか支那を軽んじたものは、ただの一つもなく、支那は東洋の一大帝国として見られていた。」(『明治大正見聞史』p33～p34)

こう感じていた日本国民が、日清戦争を経てどうなるのか。

「戦争の初めに持った不安の念が人々から脱れると共に、勝に乗じてますます勇む心と敵を軽蔑する心とが、誰の胸にも湧いて来た。戦争が始まると間もなく、絵にも唄にも支那人に対する憎悪が反映して来た。」「初めの中、内心では誰も支那を恐れていたのだ。ところが皇軍の向うところ敵なく、実に破竹の勢となったから、俗謡も絵も新聞雑誌も芝居も、支那人愚弄嘲笑の趣向で、人々を笑わせるものが多かった。」(『明治大正見聞史』p39～p40)

この読み聞かせの中で当時の国民の変容を知るようになるが、この後生徒たちには、現在中国に対してどのような感情を抱いているかを問う。こうして最後に“今の自分”に戻して色々な立場に身を置いて考えたことを実感させながら、自分の認識と向き合う手立てとする。この際、中国に縁のある生徒には自身の認識について語ってもらう。

ちなみに、この錦絵はデジタルライブラリーでも見ることができることを伝え、多様な種類の錦絵がまだあることや実際に保管している博物館について紹介をする。

3-2 日露戦争

日露戦争については、日本政府の立場、天皇の立場、日本の兵士の立場、日本国民の立場、ロシア皇帝の立場、ロシア国民の立場、清の立場から考えていった。

まず、当時を生きた日本人はどのように戦争を捉えていたのかを知るために、

- ① 万朝報の内村鑑三の記事
- ② 平民新聞の幸徳秋水の記事
- ③ 明星で発表した、与謝野晶子の『君死にたまふことなかれ』
- ④ 太陽で発表した、大塚楠緒子の『お百度詣』
- ⑤ 七博士の意見書
- ⑥ 天皇の露国に対する宣戦の詔勅

のそれぞれの史料を全体で読み、万朝報が開戦論に転じた背景や各々の人物の補足をしていく。その後、次の課題を出して理解度をはかった。

課題：この①～⑥の史料を読み比べ、その上で1つを選ぶか、複数を選んで比較する、などをして、書かれていることに対して自分はどのように考えるか、意見を書きなさい。ただし、自身の経験や今まで学んだことを関連させて考えることを奨励する。

この課題の評価は以下のようなルーブリックに基づいて行なった。

	キャップストーン	マイルストーン			ベンチマーク
		4	3	2	1
3. 自律的に活動する	3A 大きな展望の中で考える能力	日露開戦の是非について、多様な視点で書かれた文章を読み比べ、それらをおまえるだけでなく、自分の経験から関連する事象も取り上げ、考えを論作文にすることができ	日露開戦の是非について、多様な視点で書かれた文章を読み比べ、それらをおまえながら自分の考えを論作文にすることができ	日露開戦の是非について、多様な視点で書かれた文章の中の1つの視点に即して自分の考えをまとめることができる。	日露開戦の是非について、多様な視点で書かれた文章の主張の要旨をまとめることができる。

※3AはOECDが示すキー・コンピテンシーに対応。

この活動から集まった生徒の意見を分類すると、

- ① 日露戦争は避けられないものであり、日本は平和的解決をしようとロシアに提案をしたが、それを無視したのはロシアなので、自国防衛のために仕方がなかった、とするもの。
- ② 非戦論者の勇気を称えつつ、国民の意思表示次第では、戦争は避けることの出来るものだ、とするもの。
- ③ 天皇の勅書や七博士の建白書を批判して、戦争はいかなる理由であってもしてはならないとするもの。
- ④ 戦争の愚かさに気づいている人がこれだけいて、なぜ避けられなかったのか、というもの。
- ⑤ 今存在している命を大切とみるか、将来を見越して「国」というもの自体を命の器として大切にみるかで判断が変わる、とするもの。
- ⑥ いずれかの人物に共感して、自分の意見を述べるもの。

と、このように大別された。

この意見を似たもの同士でグルーピングし、じっくり自分たちの主張を整理した上で、次に他の視点から意

見を述べた人が1人ずつ所属するグループに移動し直し、多様な意見に触れることを通して、さらに認識を深めることを考えた。しかし、今年度は残念ながら時間の都合でこの学習はできずに、生徒からの意見を教師で添削して、足りない視点を補うようなコメントと共に、良い視点の意見を紹介して終わってしまったことが悔やまれる。いずれにせよ、どのような生徒にも共通してみられる視点は、世界情勢をみて避けられない戦争だったとしても、何かしら回避の糸口があるはずだし、いずれにせよ戦争によって尊い命を奪うことだけはしてはならない、というものであった。

次に戦局だ。日露戦争の場合は、映像で残されているため、当時のニュース映像より戦局を追っていく。(['ニュースで見る日本史 1巻』「日露戦争」「日本海海戦」山川出版社より)

このニュース映像が当時を身近に感じさせるため、生徒は食い入って映像を見ていた。このときには、日清戦争同様、戦局の描かれた地図を配布し、同時に地理にも着目させる。

陸戦：旅順攻防戦での消耗戦についての悲惨さについて、その光景を目の当たりにした兵士の証言等を紹介しながら説明をする。

海戦：日本がバルチック艦隊を破った日本海海戦における、丁字戦法について、説明をしたい生徒を募り、説明をさせる。(※クラスに1~2人はこの範囲に精通している生徒がいる。)前で説明してくれるかはその場の交渉次第だが、生徒が説明をすると、必ずその他の生徒もくいついて聞いている。

日清戦争を経ての日露戦争ということや、非戦論・反戦論を読んでいる生徒は、旅順攻防戦のエピソードを話すと日露両兵士の生還状況についても気になっていた。そこで、日清戦争と比較した上で、

- ① 日露戦争に動員された兵士は当時の男性の約何人に1人か。
- ② 動員された兵士のうち戦死者の割合はどの程度だったか。

という算数の問題を解かせるのだが、これをするだけで、多くの犠牲者が出たことがわかると同時に、人の死の重みは数字でははかれないものであると気づく。

続いて、このような破格の死傷者数が国民に深い傷を遺し、これを少しでも鎮めるために、日露戦争埋没者碑を全国に設置したという点に注目させる。日露戦争埋没者碑は本校の近くの駒繫神社境内にあるため、実際に見学が出来るというのだが、これも時間の都合で見学が難

しかったため、写真を見せて存在を伝え、身近な神社等にも点在していることを意識させる。この促しは、一定数効果があり、たまたま訪れた神社に日露戦争埋没者碑があったという情報は、現在高校2年生になった生徒からも集まる。

続いて、講和条約についてであるが、この日露戦争においては陸海軍共に日本がなんとか勝利を重ねたが、ロシアは降伏をしなかったために、アメリカの斡旋により条約が締結される。このことは、条約名にもなった地がアメリカの地名であることから導きだし、そこからどうしてアメリカが斡旋せねばならなかったのか、日本とロシアの立場と国民の状況を探って考える。ここで、国内は具体的にどのような状況だったかをまとめる作業をさせることで、日本の国民負担の限界を越すほどの経済状況とこの先ロシアに決定的な敗北を与える国力など一切ないことに気づく。

こうして結ばれたポーツマス条約については、まず当時のニュース映像でポーツマスにおり立ちパレードを行う日本全権小村寿太郎の映像を見る。(['ニュースで見る日本史 1巻』「ポーツマス条約」山川出版社より)

こうしてこの講和条約は締結されることとなるのだが、その過程については日本全権小村寿太郎の立場、ロシア全権ウイッテの立場、などに身を置いて考える手段として、大阪朝日新聞の当時の記事を時間で追っていく、ということをした。この作業を通して、いかに厳しい交渉の末に成立した条約であったのか、両国ともに譲らない、譲れない緊迫した状況を読み取らせる。

生徒たちは、当時の日本における報道待ちの国民の気持ちに思いを馳せつつ、条約締結過程がどれだけ大変なものだったとしても、その結果、賠償金が得られないことに対しては政府を攻撃せざるを得ないような窮地に立たされているということを述べていた。

3-3 第一次世界大戦

第一次世界大戦は、日本史ということもあり、日本の参戦理由について探っていく、日本がこの戦争に何を根拠にどのように関わっていったのかをみていった。その際、日本政府の立場、天皇の立場、清の立場、ドイツの立場、イギリスの立場、アメリカの立場、日本国民の立場、で考えていった。

まずは、日本の参戦理由を知るために、井上馨の意見書を読むことから、井上馨はなぜ第一次世界大戦を「天佑(天の助け)」と言ったのか、を考えていく。これに対しては、西郷隆盛が征韓論を唱えた理由についてじっ

くり考えた経験があるため、この枕詞のもとで「政府に向けられていた民衆の意識を国外へ向けるため。」という意見がまとめられている生徒が多いことが印象的であった。また、「中国における日本権益の拡大のため。」という見逃せない点についても言及できていた。

続いて、何を根拠に参戦していくのかという点に関しては、前に日英同盟の史料読解をしっかりとやっているためすぐに答えてくる。そこで、実際のイギリスの動向と日本の強い参戦意志、そして地中海への艦隊派遣とそれに伴う結果等に触れていく。

ここまでを終えてから、視覚教材で全体的な戦況をみていく。(『動く写真集 ムービー日本史 3巻』「第一次世界大戦」山川出版社より)

このときも同時に世界の動向のわかる地図を配布し、地理的にも経過を追わせる。また、新兵器の登場にも着目させ、戦争の形態の変化も考えさせる。ここにおいても数字でははかることのできない人の命について胸を痛ませる生徒の姿が目立つ。

さて、戦場とならずにヨーロッパに軍需品を売り続けた日本は、大戦景気を迎える。しかしひとたび大戦が終結すれば戦後恐慌の波が押し寄せてくる。このサイクルや、戦争に関する経済のことについては、日清戦争・日露戦争とみてきたため、ここにおいても同じように考えていく姿勢がみてとれた。

また、日本が韓国を植民地化していき、中国へもその手を伸ばす中で、当時の中国国民がどのように感じたかについては、中国の教科書の記述等から当時の色を伝えていく。

さらに、第一次世界大戦のときには第二次世界大戦へのつながりを点在させておかねばならない。そこで、日本が赤道以北のドイツ領南洋諸島の委任統治権を得たことに対するアメリカの視点に着目させたり、その後の平和機構設立を経ての不戦条約の締結もむなしく第二次世界大戦が引き起こされてしまった点を探ったりする。この不戦条約の限界点については、なかなか解ける生徒がおらず、問いとしては難しいのかもしれない。しかし、どうすれば戦争を防げるのか、今後戦争を起こさないためには何ができるのか、ということをも“命”から考えてきた生徒たちが、この問いを必死で解こうとする姿は頼もしかった。

3-4 第二次世界大戦

第二次世界大戦においては、『ニュースで見る日本史 1巻』を活用し、一通りの日中戦争・太平洋戦争への授業をしたあと、国立歴史民俗博物館の貸出教材“戦争ポス

ター”を活用し、当時の様子を探る。これは、民衆を戦争へ駆り立てるのに一定の役割を果たしたポスターのレプリカで、裏面に解説もあり、戦時下の国民生活の様子を絵と文から学習できるものである。横 285mm × 高さ 400mm の縮小版で、「砲弾羊羹」「防空訓練 福岡県」「比島決戦重大化す」「全村をあげて松根赤だすき」「陸軍少年戦車兵・通信兵・砲兵生徒募集」「少年産業戦士募集」「国民体力法被管理者調」「祝えシンガポール陥落を！買え戦時貯蓄報国債券を！」「繊維工場防火週間」「大東亜戦争だ必ず勝つのだ！！」「勝って兜の緒を締めよ 陸軍省」「厨芥を生かせ！」「興亜の晴衣国民服」「啓発新聞」「陸軍少年飛行兵」「陸軍特別幹部候補生」「この仇は俺達が討つ！」「武装台湾」「民一億の回覧板」「節米一割」「今こそ援護も決戦調」「翼だ油だ増産だ！」の22種類のポスターがある。

このうちの、「国民体力法被管理者調」については、教員で模擬発表をしながら解説をし、残りの21種類のポスターは、隣同士2人1組をつくり、ランダムにポスターを引いてもらい、そのポスターについて解説したものをワークシートにまとめて、発表していく。(【資料】の学習指導案参照)

士族の商法のお品書きの読解、日清戦争・日露戦争期の風刺画の読解、文化史の授業時の作品読解をしてきている生徒たちなので、書かれている文字だけでなく、その1枚に描かれた様々な観点からの読解を奨励した。

ワークシートの内容

- ・ポスターの見出し
- ・いつ頃のものか
- ・見た目から気づいたこと
- ・ポスターの内容
- ・ポスターの内容からわかったこと
- ・疑問点

「国民体力法被管理者調」を教員の解説にする意図は、筆者の曾祖父はこのポスターで呼びかけを行なった中島飛行機で働いていたため、祖父からこのときのリアルな状況を聞くことができている点にある。そのため、1940年制定の国民体力法の説明と、見た目の印象からわかる、たくましい男性像から病者や弱者へのけわしいまなざしについてなどの一般的な発表の見本をしたあとで、飛行機メーカーの従業員にも検査の手が及ぶほどの状況であったり、怠ると処罰される状況であったりしたことを伝えた上で、曾祖父が体験した中島飛行機の従業員時代のエピソードを伝える。

以下、生徒が読み解き、発表した内容を紹介する。

「砲弾羊羹」

昭和期。羊羹が売られていて贅沢品とみなされていない時期なので、初期と予想される。基本的には羊羹の宣伝だが、砲弾というネーミングや健勝祈願という文言、赤と黒の色使いなどから、戦争の機運が熟していることがわかる。背景に使われている日章旗や諏訪神社の神聖な水から作られているところから天皇崇拜や愛国心の伸張に役割を果たしたと考えられる。

「防空訓練 福岡県」

福岡県民を対象として一週間行なわれた防空訓練の目的・内容・心得が書かれている。“本県は大陸に接近して居る上に重要工業地帯である。”という記述から、福岡が中国軍機の空襲可能な距離に入っていたことと、八幡製鉄所を狙われる危険性がわかる。したがって、日中戦争以降のものである。ただし、“逃げる”などの言葉は一切使わず、“備えあれば憂いなし”というフレーズを使用していることから、“負け”を感じさせない姿勢が伺える。

「比島決戦重大化す」

比島とはフィリピンのこと。1944年10月にフィリピンレイテ島に上陸したアメリカ軍に対して日本軍は航空戦力を集中して反撃したが、質量ともにまさる米軍機の前に敗北を喫した。機（チャンス）はあっても飛行機がないと戦争に勝てないから、と飛行機の増産を訴えるもの。2色しか使われておらず、資金難が伺える。文字は七五調で脳内に残るものになっている。絵はないが、桜の花びらを描くことで日本の誇りを象徴している。もしくは“笑って突込む神鷲”とあり、特攻隊の登場をさしているため、儚く散った兵士の命を桜で表現したのかもしれない。

「全村をあげて松根赤だすき」

南方からの石油輸入が途絶える中、松根からとれる油を石油の代わりに用いようとして、人々は重労働にかり出された。今まではアメリカに勝っているというものが表れていたが、描かれた飛行機は墜落しかけており、国民の協力を切に訴えるものである。このことから、1944～45年の終戦間近だとわかる。五・七・五で内容が入ってきやすくしている。結局松根油は質が悪くほとんど役に立たなかった。

「陸軍少年戦車兵・通信兵・砲兵生徒募集」

5つの陸軍学校への生徒募集ポスター。15～18歳の少年が対象で、高等科卒業程度の学力を試す試験が課されての入学となる。このことから、太平洋戦争の末期に少年をも兵力として使おうとしたことがわかる。絵の少

年の目は生き活きとしてまっすぐ前を見つめて、若々しくたくましく描かれており、足りない兵力を補うために、理想の姿を描くことで、当時のあるべき姿を示している。

「少年産業戦士募集」

熟練工が兵士として戦地に駆り出されたので、その後を埋めるために満14～16歳の少年に対して日立製作所で働くことを奨励したもの。このことから、太平洋戦争期の後期だということが伺える。より多くの少年を募るため、あえて“戦士”という言葉を使っている。日立製作所のマークをあたかも軍のマークであるかのように勇ましく描いている。全体的に色が明るく、好印象を与える。斜め上から光が差し込んでいて、描かれた少年の目はその光の方向を見つめ、立派に描かれており、憧れを抱かせる効果がある。

「祝えシンガポール陥落を！買え戦時貯蓄報国債券を！」

太平洋戦争でのシンガポール攻略を記念して、政府が発行した戦費調達のための国債を買うように勧めたもの。この時期は1942年。“祝へ”“買へ”と命令口調から快進撃による勝利への余裕が読み取れる。見出しが韻をふんでおり、頭に入りやすい。東京を中心とした掲示によって、東京に集まる富裕層から資金を集める狙いがある。日本の国旗がメインに描かれていることから、愛国心を高めようとしている。

「繊維工場防火週間」

“燃やすな護れ国の富”という記述から、1925～43年まで存在し続けた、火災防止の注意喚起ポスターであるとわかる。これは、関東大震災での火災による悲劇を受けて、火災を二度と繰り返さず、国の財源である繊維業保護をうたったものである。赤と黒で炎の恐ろしさを伝えている。

「大東亜戦争だ必ず勝つのだ！！」

太平洋戦争の前線で戦っている兵士達を偲び、国民も最低限の生活で頑張ることを奨励するものである。ポスターの内容が絶叫調であることから、余裕の薄れを感じられるため、戦局の悪化した1943～44年あたりのものだと考えられる。零戦の写真を載せることで、兵士の頑張りや伝えようとしている。店頭行列や買溜め、買漁りの禁止を訴えており、国民にも最低生活の限界がきていることがわかり、ポスターに書かれている“最低生活の保障”なるものが叶うはずもない状況がわかる。

「勝って兜の緒を締めよ 陸軍省」

太平洋戦争が有利に動いていた時期のポスター。しかし、その優勢は、1942年6月のミッドウェー海戦までの半年のものだった。オレンジの背景が清々しさを表す。

銃剣をもった凛々しい目つきの憧れの日本男児が描かれており、油断大敵という戒めのもと、さらなる勝利を目指すために戦争への協力を国民に呼びかけ、士気を高めている。

「厨芥を生かせ！」

家庭から出る生ゴミも家畜の餌にできるし、全国的な視点で見れば一億円の価値にもなるという戒め。国家が国民生活の隅々まで干渉していたことが伺える。バケツ等の金属製品を日用品として使用している様子や、革ベルトやちゃんとした着物を着ている人が描かれているため、戦争の早期のポスターだと考える。描かれた家畜がリアルでふっくらしており、威圧感を漂わせたものとなっている。

「興亜の晴衣国民服」

1940年“大日本帝国国民服令”による衣服の簡易化が行なわれた際の洋服店のポスター。軍服がモデルになっているが、背広を仕立て直して着用してもよかった。“興亜”と言っているのに、描かれた男性は日本人とはほど遠く、明らかに八頭身の西洋人体型。背景の銀色の飛行機からは、国民服の最先端のファッション性を強調すると同時に、日本人の西洋コンプレックスが感じられる。

「啓発新聞」

沖縄に特攻機を送れとの新聞の内容から、東京大空襲後、沖縄戦さなかの1945年4～6月のものとみられる。必勝への道は、笑顔でいて決戦日は引き締めて頑張ることが大事、という絵。“父さん頑張れ”という感動話を紹介した記事。戦争で張りつめた人々の冷たい態度や社会を皮肉り、心の余裕を訴えかける8コマ漫画。国家献金、1人10円で参加すれば、10万円があたるチャンスという呼びかけ。まだ海軍が募集されており、民衆の戦意を下げないような工夫がこらされている。

「陸軍少年飛行兵」

15～18歳対象で、航空兵を募集するもの。日中戦争以降、航空戦力の大拡張のため、航空隊の数を増やす必要があった、1943年と考えられる。市町村で出されたもので、願書受付日や入校日、問い合わせ先が書かれていることから、相当の人数が必要だったことが伺える。青空に飛ぶ戦闘機が格好良く描かれ、少年の心をつかむ構造になっている。赤などの血が想定される色使いをしていない。しかし、実際は特攻隊として命をおとした者も多かった。

「陸軍特別幹部候補生」

1943年、“特別幹部候補生”制度を設けた陸軍が、15～20歳の男子に1年半の教育をほどこして下士官とし

たもの。右斜め上から凛々しい兵士に光が差し込み、背景に航空機と海がみえることから、“航空”と“船舶”の兵士が不足していることがわかる。右斜め上から差し込む光は朝日のように感じられるため、兵士は南の島々を向いているのではないか。

「この仇は俺達が討つ！」

1944年2月、マーシャル諸島、クエゼリン・ルオット両島を守っていた守備隊6800人がアメリカ軍の攻撃により玉砕した。アメリカが“日本の兵隊は最後まで退かず、恐るべきものだ”と報道したことを引用し、“ヤマトダマシイ”等の格好良い言葉で戦意高揚につなげた。ポスターに描かれた男は日本人らしい顔立ちで勇ましくハチマキをしめており、国民の理想像がみてとれる。敵対心を煽って、航空機の量産につなげようとした。

「武装台湾」

植民地の人は信用できないという理由から、徴兵を行わず1942年から志願兵制であったが、戦局の悪化に伴い、台湾でも徴兵制を1945年に実施することを決定し、その準備のために徴兵検査を実施するためのポスター。1944年頃か。台湾の地図が背景にある。“本島同胞”として台湾人に、日本人として死ぬことを要求したが、戦後台湾における日本の主権を放棄すると、日本人ではないからという理由でいまだに公的賠償を行っていない。

「民一億の回覧板」

国民貯蓄組合法の施行開始。国債購入、保険加入、銀行や郵便局への預金呼びかけ。保険加入を安心して理想的としていることから、安定した毎月の収入を求めている様子が伺える。預けたお金は自由に引き出せないが、この注意は書かれていないのが巧妙。

「節米一割」

代用食を摂って、米を食べる量を一割減らし、戦地に送るよう訴えたもの。これは福岡県のものだが、県名は後から貼られているようなあとがあるため、全国に行き渡ったのではないか。1940年には供出制になっているから、それ以前のもものと予想される。1割減らす、などの具体的な数値目標と、お米を大切に・混ぜご飯を食べよう・麺等の代用食を食べよう・よくかみましょう、などの例があげられており、わかりやすい。

「今こそ援護も決戦調」

兵士が家族のことを心配するあまり戦争に非協力的になることを恐れてつくられた“軍事保護院”からのポスター。太平洋戦争後期であろう。女性が千人針を縫っているが、笑顔で血色が良い。兵士が安心するような理想

の家族像が描かれている。背景の飛行機からは、兵士を送り出した家族もイメージさせている。

「翼だ油だ増産だ！」

日本の飛行機がアメリカの航空母艦を撃沈している。この飛行機は海軍一式陸上攻撃機で、ガソリタンクに砲弾装置がないため、わずかな被弾で炎上墜落し、実際はこのような米空母撃沈はなかった。下からのカメラワークで上に向かって飛ぶ飛行機が描かれており、強そうな感じをみせる。1941年に設置された軍需省の存在がわかるため、1941～45年頃のもの。“油”だけ文字の色が違うため、ガソリンの必要性がわかる。



↑発表の様子。傾聴し、内容をワークシートにまとめる。

この活動を通して、特に国民の生活を色々な視点から知った彼らには、その後、当時のニュース映像などの視聴覚教材やら筆者が全国の博物館で撮影を許可してもらってきた写真やらを見せ、また、筆者の親族の戦争体験について語ったり、生徒の中でも親族から話を聞いたことのある人には語ってもらったりして、より身近なものに戦争をもってくる。

この第二次世界大戦においては、博物館にいったり、戦場跡地にいったり、実際の体験者の話を聞いたりすることが生徒の心を大きく動かすことがアンケートからわかっている。しかし、現実的にそれが難しい状況にあるなかで、できることを探った結果が今回の実践である。認識の変化として最も多かった回答の、視聴覚教材は存分に使用し、その有効性は定期考査での意見から実証された。

しかし何よりも、ポスターの解説について、今までの学習を活かしながら生徒だけで十分すぎるほどに第二次世界大戦における日本の様子を掴んでいけたことが成果である。定期考査で書かれた内容には、「敗戦が確実な状況でも必死で国民をだまして総力戦を遂行しようとする姿勢がみられたため、自分たちも考える力を養わねばならないと思った。」という意見が多くあった。

3-5 2年生の総合の特別講座

1年間日本史において戦争学習をしてきた2年生に対しては、今年度は3回特別講座をして、戦争に関連して平和や社会のあり方について認識を深めた。これは選択での開催なので1年間教えた全生徒に講義はできないのだが、継続での変容が探れた。

●旅先で博物館に行ってみよう

- ・博物館の起源
- ・博物館の定義
- ・広島平和記念資料館における展示の紹介

問：気持ち悪くなったと苦情が入ったため、撤去が検討された被爆者の蠟人形。この蠟人形を撤去していいのか、すべきでないのか。

生徒からは、「気分を害するのは当たり前。それが実際におこった現実。その現実から目をそらすべきではないし、その気持ち悪いという感覚に気づくことが大切。」「自分もみたら気分が悪くなると思うが、向き合わねばならない。そのコーナーの前に注意書きをして、現実と向き合う覚悟のある人だけ入るようにすれば良い。」などの意見が出て、撤去をすべきでないというものがほとんどだった。1人だけ、「確かに人形は怖いから、別の方法で事実を伝える手段があるといい。」という意見であったが、発表をして様々な意見を聞いたのちに注意書きの有効性がそのときの合意となった。残すべきであるという意見から、そのための対策まで考えを上げられることに感動した。

●世界遺産について考える

- ・世界遺産の定義
- ・明治産業遺産の登録特集のビデオ
- ・韓国が反対していることに関して。

日韓関係のビデオからみえる、新たな視点を紹介する。生徒からは、「日本が昔やったことをきれいに忘れようというものではない。決して忘れてはならないし、きちんと理解しなければならない。しかし、歴史を学んでいる中で、自分が昔の日本人を理解できないことが多くあるように、同じ日本人でも昔と今では違うのだ。現実としておこった過去を両国が理解した上で、アニメやアイドルなどを通した日韓の文化交流が次の時代の友好関係構築に役立つことを望む。」などの意見が出て、真の“ゆるし合い”の大切さに気づく生徒が多くいたことは嬉しかった。

●第二次世界大戦とディズニー

ディズニーランド・ディズニーシーに行ったことのある、いわゆるディズニー好きたち61名がこの講座をとっていた。しかし、ピクサーも含めたディズニー映画を10作品以上観たことがあるかと問うと、手が挙がったのは10人未満であった。続いて、長編カラーアニメーションの第一作目は何かを問うと、知っている生徒はいなかった。そして、その時代がいつ頃かも知る生徒はいなかった。

1937年に、ディズニー初の長編カラーアニメーションとして公開され大ヒットを成し遂げた『白雪姫』について、DVDの特典映像を見せながら、製作過程をみていく。この際日本は1937年どのような状況であったかを説明する。

その後、ディズニー作品のパッケージを公開年代順にスライドで見せ、その都度日本はどのような生活がなされていたのか、ウォルトディズニーはどのような考えをしていたのか、ディズニー社の経営状況はどうだったのか、を解説していく。

そうした中で、第二次世界大戦前のディズニー作品、大戦後の作品を整理して、大戦に際してはディズニーのプロパガンダアニメーションの存在があったことを伝え、作品を鑑賞する。

問：ディズニーに対して、あなたの認識はどのよう

に変わり、今はどう感じていますか。

生徒からは、「ディズニーが純粹に好きだっただけに、日本が悪く描かれ、戦争を駆り立てるようなプロパガンダアニメーションを制作していたことがショックだった。しかし、その当時、資金調達のため・アニメーターを失わないためには仕方がないことであったことなどから、この時代を生き抜く手立てだったのだと思う。このときのこの判断が、今自分を癒し、夢と幸せを与えてくれるのであるから、昔を知った上で、今あるディズニーを大切思っていきたい。」という意見が多くみられ、今まで何も考えずに好きだったディズニーだが事実を知って嫌いになった、という意見はなかった。事実を受け止めて、自身におとし込み、考えて自身の認識を見直すという作業をこの1時間の講座の中という短時間でできるようになった生徒に感動を覚えた。

この講座の最後には、ウォルトディズニー夢の90周年展の紹介をして、ディズニーを歴史として、文化遺産として価値を見出すことなどにも触れて未来のディズニーに思いを馳せる時間をとった。

4. 結果と考察

アンケートからわかった映像資料の活用が、臨場感やひとごとと捉えないようになる手立てとして有効であるということが、最後の定期考査における意見欄からも実証された。また、iPadなどのICTを利用して絵画の細部を見せることや、博物館のデジタルライブラリーなどの活用の中で、実物はどこで見ることができるのかということも伝えていた結果、戦争の遺物や美術に対する興味関心へとつながり、美術館・博物館へ行って感じたことを話してくれる生徒が増えたことから、ESDの観点から博物館と生徒の生涯学習の架け橋の役割を果たすことも可能となった。さらに、生徒が様々な視点に立ち、その都度共感の姿勢や批判の態度を見せつつも、最後には鳥瞰しながら自らの問題として戦争を捉えることで、自ら歴史を学ぶ意義に気づき、平和の享受を望む頼もしい市民へと成長していくことがわかった。教師の働きかけと工夫次第で、生徒自身の専門分野や興味・関心と関連させながら歴史を捉えることができるようになるのだ。この点においては、定期考査でのとある生徒の意見をご覧いただきたい。

「戦争はどうしてなくなるのか、それは世界規模で抱える問題である。僕は今まで国同士で戦争をして死んでしまう人がいるのに何回も行なわれており疑問に思っていた。そして、今までの授業から、土地や景気などの都合利益が戦争によってあげられることを学んだ。しかしだからといって良いものではないと、太平洋戦争での虐殺が映されたビデオなどを見て改めて思った。そして僕は、どうせ政治家等の偉い人にとっては傷つかず利益も上がるもうけとでも思っていたのだろう、と思っていたのだが、2月3日に行なわれた科学見学実習で考えが変わった。僕は医学研究所に行き、アルツハイマーなどの研究を見てきた。そして、アルツハイマーなどの治療法はほぼ確立されており、マウス等の実験では結果が出ているのだが、人体実験は倫理的に行なえず発展に行き詰まっている現状があることを学んだ。医学は倫理と発展の間で揺れており、皮肉にも倫理が少し薄れた戦争時に医学は発達した。医学だけでなく、

今現在、我々の生活に関わる大部分が戦争の影響を受けているのではないかと思った。僕たちは戦争の中で発展した、生み出された事物を踏んで生活していると考えさせられた。そう考えると戦争をただ単に非人道的だと批判するだけでは足りないと感じた。もっと向き合う必要があると思った。」

こういった意見に対しては、教師の所感を返信する。自己完結で終わることなく、考え続ける人間へと導くことが目標であるため、その思考プロセスをまずは評価し、次のステップへと繋がることばがけをしていく。このやりとりは、戦争の授業時だけでなく、日頃の活動の中で行なっていたため、生徒の自由な思考とその返信という自然なやりとりの中で視野の広がりにつなげる心がけをした。

日頃の活動の中で課したものの具体例を挙げると、夏休みの宿題として出し、2学期最初の授業時に一人1分程度で発表してもらう以下の課題がある。

①夏休みの間に自分が旅行などで訪れたところにある、歴史的なもの or 世界遺産（登録はされていない遺産や自然も自分がいいと思えば可）の写真を撮って、

- ・行った場所（国や地名）と所在地
- ・どういう歴史に関連するものなのか or なぜ世界遺産になっているのか（世界遺産になっていないなら、どこに価値を見出したか）

を明記した上で写真と一緒にレポートとして提出してください。

②もし博物館に行った人がいたら、そのパンフレットなどを余分にもらってきて、その展示のどこが気になったり感動したり興味をそそられたりしたのかの感想を様々な視点から好きな紙に自由に書いて、パンフレットとともに提出してください。

※①は全員必ず提出。②は任意。

※写真を貼って説明を書く紙は自由。

※地域の指定はしない。海外でも日本でも可。

※旅行の予定がない人は、自分の地域にある歴史に関連の深い何かを見つけて書く。

※評価は20点満点で行い、学年末の成績に合算する。

この課題を通して自分の感じ方を知り、身近に歴史を感じ、自分の考えたことを発表することで自身の頭が整理される。またクラスメイトの発表を聞きながら質問を考えることで発想力が豊かになるし、他者理解にもつながる。さらに発表者の良い点を評価する活動を通して傾聴の姿勢も育むことができる。このような日頃の訓練も社会科にとって大切なものである。

5. まとめと今後の課題

生徒には、成果物を全てまとめ、ポートフォリオにさせることで、1年間での自身の変容に気づかせるが、これが生徒の目でみえる感動となり更なる成長へとつながった。ただし、生徒の持つ意見に対して教員はフィードバックできたのだが、クラス全体でディベートをする場が設定できなかったため、より多角的な意見を取り入れるためにもそのような場を設定していきたい。

最後に、懸念すべきは、アンケートの内容で“戦争経験者の話”の種類に、第二次世界大戦を“兵士”として生きた人の話を聞いている生徒がいなかったことだ。いよいよ、戦争経験者の生の声が聞けなくなる時期が来てしまったようである。もちろん、まだ体験者は多くいらっしゃり、実際の体験を聞くことができるのだが、これが一生続く訳ではないことが現実である。戦争体験者がなくなってしまった後に何ができるのかを考えなくてはならない。この状況で、一定の効果が期待できることとして、体験者の語りを映像で見せるということがあげられる。しかし、直接体験者から話を聞くこととは大きく差が出てしまうことは否定できないだろう。この後何年も経ったあとの社会科教育がどうあるべきかを考えていかねばならない。すぐにでも体験者の語りを映像で見せることの効果や、戦争体験の記憶が劣化しない手立てについて探していきたい。

《引用文献》

門脇厚司『子どもの社会力』岩波書店：p.61, p.63

生方敏郎『明治大正見聞史』中公文庫：p.33, p.34, p.39, p.40

《参考文献》

国立歴史民俗博物館 HP 内、先生のためのれきはく活用
 〈<http://www.rekihaku.ac.jp/education/practice.html>〉

【資料】第二次世界大戦の戦争ポスター活用授業

本時の目標

- ・ポスターから学び得た情報と授業で得た情報を統合して、当時の社会を考察する。
- ・第二次世界大戦当時の国民生活を理解する。

本時の学習指導案

	時間	生徒の学習活動	指導上の留意点・評価の観点
導入	7分	<p>Q 現代、よく街で見かけるポスターとして、何があるか。</p> <p>第二次世界大戦当時、街にはどのようなポスターが貼られていたのだろうか。</p> <p>「国民体力法被管理者調」 ワークシート（全てのポスターの名前がかかれたもので、年代と内容と気づいたことと疑問のメモができるようなもの）に説明をまとめる。</p>	<p>例として食品会社の商品宣伝ポスターや音楽CDの宣伝ポスターを持参し、見せる。</p> <p>国立歴史民俗博物館から借りた、戦時中のポスターを、初めに1枚全体で見て、そのポスターが作られ、貼られた意味を考える。（活用方法の説明）</p> <p>見た目でもどのような印象を受けるか。1940年制定の国民体力法の説明。飛行機メーカーの従業員にも検査の手が及ぶほどの状況。怠ると処罰される。</p> <p>教員の曾祖父が中島飛行機の従業員だったため、そのときのエピソードを伝える。</p>
展開Ⅰ	15分	<p>隣同士で二人一組のペアをつくり、一枚ずつポスターを引いてもらい、ペアごとにポスターの意味を考える。ワークシートに記入する。</p>	<p>ワークシートには、ポスターの見出し・時期・内容・見ただけから気づいたこと・内容からわかること・疑問点を記入する。</p>
展開Ⅱ	25分	<p>一組2分で、自分たちの解説したことの発表。ワークシートに他の人の説明をまとめる。</p>	<p>ワークシートは、全てのポスターの名前がかかれたもので、年代と内容と気づいたことと疑問のメモができるようなものを用意する。</p>
まとめ	3分	<p>第二次世界大戦中の国民生活の状況を整理。</p>	<p>ワークシートを回収し、二人一組で解説したものを二人同じ点数で、人の発表を聞いて自分の言葉でまとめたものを個人の点数で評価する。</p>